

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02609

研究課題名（和文）博愛原理の再検討：愛他精神に潜む暴力性をメタファ複合の観点から乗り越える一試み

研究課題名（英文）Re-evaluation of Biblical Philanthropical Principles: A Study of Metaphor-Mix to Overcome Violence behind the Ultimate Love-Command

研究代表者

浅野 淳博（ASANO, ATSUHIRO）

関西学院大学・神学部・教授

研究者番号：20409139

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：古代から伝わるキリスト教の行動原理としての博愛主義は、人類のためにキリストが死んだという物語を基礎に据えています。しかしこの思想は、「神がキリストの死を要求する」という加虐性と大勢の利益のために一人が犠牲となる」というスケープゴートの構造ゆえに、現代ではしばしば批判の対象となっている。その結果として、キリスト教の人道活動の正当性、さらには他者との協働による人道活動の可能性が疑問視されている。本研究は、本来この思想が加虐性とスケープゴートの構造から遠くへだたっていることを説明し、現代の人道活動の行動原理がいかに表現されるべきかという議論に方向性を定めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、概要で述べたとおり、キリスト教の博愛思想の根源にある聖典が、神の加虐性やスケープゴート的な思想とはかけ離れていること、これらの誤解がキリスト教会の歴史の中で生じたことを明らかにした。本研究はこのような誤解からキリスト教会を開放することによって、キリスト教が他の救済組織と協働して、より円滑に博愛主義的社会活動に従事することを可能とする一助となる。

研究成果の概要（英文）：Philanthropic ideas and activities of Christianity are deeply rooted in the story that Christ died for the sake humanity. However, this story is often criticized as teaching a sadistic view of God and promoting scapegoting the marginals for the benefit of those who are in power. This type of criticism, which is often directed against Christianity from outside, makes it difficult for Christians and the churches to co-operate with other groups to engaging in philanthropic activities. This research finds that such a criticism is off the mark and helps to direct how the Christian philanthropic principles are to be expressed.

研究分野：人文学（ヨーロッパ文学、西洋古典学）

キーワード：博愛主義 贖罪論 犠牲のシステム 新約聖書 旧約聖書 使徒教父 パウロ イエス

1. 研究開始当初の背景

キリスト教の伝統的な贖罪論が近年外部からの批判を受けた。とくに高橋哲哉著『犠牲のシステム』において顕著である。高橋によると、キリスト教の救済論では、神の加虐性とスケープゴートの思想が教えられている。このような批判が蔓延る中では、この救済思想がキリスト教の博愛主義の根源にあることから、キリスト教はその救済活動において、他の集団との協働が困難になる。救済活動が多様化する今日の状況、すなわち救済活動が多くの異なった集団の協働によってこそ達成しうる状況においては、致命的なことである。本研究は、このような批判が正統なものかを検証する必要から始まった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、愛他精神の動機としてその中核に十字架死を据えることへの、キリスト教共同体内外からの批判を古代文献の分析を通して再検討し、より説得性に富む博愛原理の提示に寄与することである。具体的には、キリストの死を説明するメタファ群(犠牲、追放儀礼、英雄死、殉教死)を使徒パウロがいかに用いたかを、古代ギリシャ・ローマ文献およびユダヤ文献と比較しつつ精査し、これらのメタファが示唆する暴力性と博愛原理との関連を明らかにする。この古代文献の解釈学的作業は、多様な博愛原理に立つ現代の共同体や個人がより円滑に救済支援活動において協働するための議論に、重要な視点を提供することになる。

3. 研究の方法

上の研究目的を遂行するため、本研究の期間は本来4年で開始したが、新型コロナウイルスの影響で、さらに2年間期間を延長した。当初は前半(H29-30年度)を「殉教死」メタファ、中盤(H30-31)をメタファ複合、後半(H31-R2)を「犠牲」メタファの研究に充てた。それぞれの主題に関して、二次文献研究に30%、一次文献研究に40%、執筆に30%の比重で研究にあたった。前半の結果は国際学会で、中盤と後半の結果は国内学会で発表し、そこでの批評をも考慮しつつ執筆にあたった。これらの成果と、既に完了している「追放儀礼」に関する研究の成果とを併せて、単著『死と命のメタファ：キリスト教贖罪論とその批判への聖書学的応答』を本研究の成果物として公刊した。

4. 研究成果

研究成果は、上に示した単著である。以下がその概要である。

(1) キリスト教の贖罪論の背景にある旧約聖書には、義人の死が他者を神へと立ち返らせるという物語がある。この物語は、死が人の救いに繋がるという意味で神殿犠牲のメタファで表現されがちである。しかしこの物語の真意は、義人がその生き様をとおして他者を敬神へと促すことである(啓発主題)。つまり、他者の罪の結果を義人に追わせるようなスケープゴートの思想(移行主題)ではない。この啓発主題が移行主題と混同されがちのために、上で示したような贖罪論に関する誤解と批判が起こりやすい。すなわち高橋哲哉は、これら2つの主題のあいだに違いを見出していない点で、大きな誤りを犯している。

(2) この旧約聖書の物語は、イエスの生き様とその意義を説明する差異にも、キリスト教において好んで用いられた。その際に、やはり上述の移行主題と啓発主題とが混同されがちである。しかし歴史のイエスの活動を精査すると、彼が自らを神殿犠牲の代わりとなるように意識していた様子は見られず、また彼の追従者にもそのような理解はなかった。

(3) 新約聖書神学の形成に貢献した使徒パウロも、イエスを神殿犠牲のメタファで説明することがただ一度の例外を除けば皆無である。むしろ彼は、旧約聖書の伝統に則って、イエスの生き様とその延長にある死の意義を、啓発主題によって説明している。この傾向が、新約聖書ではヘブライ書において変化し、この書ではイエスが神殿犠牲の代替として説明される。

(4) のちのキリスト教の贖罪論の誤解は、新約聖書の中でも非常に特異な理解を示すヘブライ書の神学をその中心に据えて、啓発主題でなく移行主題をもってイエスの生き様とその延長にある死とを説明し始めたことによる。こののちキリスト教会の歴史は、この誤解を繰り返しつつ、非常に偏った贖罪論を発展させていった。

(5) 今日のキリスト教会は、新旧約聖書の伝統を踏まえて、本来のイエスの生き様とその延長にあった死の意義とを学び直し、その意義を今日においていかなる仕方でも発信すべきかを考察する責任を負っている。このことをとおしてのみ、キリスト教はその博愛的な救済活動において、他の集団と意義深い協働を実現することができる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 浅野淳博	4. 巻 48
2. 論文標題 イグナティオスによるantipsychonの特徴的用法と殉教思想に関する一考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 新約学研究	6. 最初と最後の頁 47, 67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 浅野淳博	4. 巻 3
2. 論文標題 周縁者への暴力に荷担しないために：イエスの死のメタファとその解釈	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『福音と世界』	6. 最初と最後の頁 12-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 浅野淳博
2. 発表標題 使徒教父文書の「殉教」思想：影響過程に関連する一考察 イグナティオス書簡群におけるantipsychonの用法を中心に
3. 学会等名 日本新約学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 A. Asano
2. 発表標題 Constructing Social Memories of Resistance: On the Martyrological Tradition in the Apostolic Fathers
3. 学会等名 Society of Biblical Literature International Meeting (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 浅野淳博
2. 発表標題 「マカバイ殉教者を記憶する初代教会の思想」(シンポジウム:「キリスト教殉教と歴史的記憶」)
3. 学会等名 日本宗教学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Asano, Atsuhiro
2. 発表標題 How Were the Maccabean Martyrs Remembered in Paul's Letters?: A Social-Scientific Approach to Paul's Self-Understanding and Theology.
3. 学会等名 Society of Biblical Literature 2018 (Denver) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Atsuhiro Asano
2. 発表標題 Colossian Haustafeln and Community-Identity Construction
3. 学会等名 Society of Biblical Literature Annual Meeting (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 浅野淳博	4. 発行年 2022年
2. 出版社 新教出版社	5. 総ページ数 360
3. 書名 死と命のメタファ: キリスト教贖罪論とその批判への聖書学的応答	

1. 著者名 A. Asano	4. 発行年 2020年
2. 出版社 T & T Clark Bloomsbury	5. 総ページ数 15
3. 書名 T & T Clark Social Identity Commentary on the New Testament	

1. 著者名 J.D.G.ダン (浅野淳博訳)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 教文館	5. 総ページ数 976
3. 書名 『使徒パウロの神学』	

1. 著者名 浅野淳博	4. 発行年 2017年
2. 出版社 日本キリスト教団出版局	5. 総ページ数 532
3. 書名 『NTJ新約聖書注解 ガラテヤ書簡』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

関西学院大学 研究者データベース 浅野淳博
<http://researchers.kwansei.ac.jp/view?l=ja&u=36897>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------